機関リポジトリ用

論文審査の結果要旨

論文題名：
看護基礎教育における正確な血圧測定のための
「状況基盤型教育プログラム」の開発と効果の検証:無作為化比較対照試験

申請者氏名：渡邉　惠

審査の所見

＜論文課題概要＞

本研究の目的は正確な血圧測定の能力習得にむけた「状況基盤型教育プログラム」を開発し、その効果を RCT（無作為化比較対照試験）により検証することである。まず初めに「バイタルサインの正確な測定　実践能力チェックリスト（Competency checklist for vital signs accurate measurement : 以下 VSAM チェックリスト）」を開発し、次に「状況基盤型教育プログラム」を開発し、看護学生に実施し、先に開発したチェックリストを用いて教育プログラムの効果を測定した研究である。

＜研究内容＞

研究 1 では「バイタルサインの正確な測定」の概念分析の結果を基に 18 項目を抽出、VSAM チェックリストの素案とした。看護教員 8 名による修正デルファイ法で内容妥当性を確認した。「状況基盤型教育プログラム」は実際の臨床現場に近い複雑な状況設定の中で正確な測定に必要不可欠な要素を学ぶ内容とし、パイロットスタディとして、3 年次看護学生による客観的臨床能力試験を行い評価者間一致率によって信頼性を確認した。その後、概念分析の結果を網羅していることを確認しながら 15 項目に精選、表現を修正しチェックリストを完成させた。

研究 2 では 2 年次看護学生を対象に、介入群には「状況基盤型教育プログラム」を実施し、対照群には従来型教育を行う RCT を実施した。主要評価には VSAM チェックリストを用いた OSCE を行ない 2 群間で比較、副次的評価として研究者が開発した「状況対応能力自己評価表」を用い、2 群の教育前後の得点の変化を比較した。介入群は 23 名、対照群は 25 名で、VSAM チェックリストの「測定方法や留意点を患者の状態に合わせて説明する」「全過程において患者の表情や言動などに注意を払い、不安や苦痛に対応している」の 2 項目で介入群の「適切にできた」割合が有意に高く、介入の効果が認められた。その他「測定時の患者の体勢（体幹・上肢・下肢の位置）は測定結果に影響しないよう安楽な状態に整える」「測定方法は患者の状況に合わせて考え、安全に行われている」の 2 項目も介入群に有意な傾向がみられ、小～中程度の効果量が認められた。「状況対応能力自己評価表」の得点には両群の有意差はなかった。以上から、本教育プログラムは正確な血圧測定に不可欠な患者への対応力を高める効果があると考えられた。

＜科学的到達・新規性＞

審査においては、介入（状況基盤型教育プログラム）の詳細、VSAM チェックリストに状況対応能力自己評価の部分を含めない理由、本チェックリストの運用可能性、学内における介入群と対照群の情報交換の可能性、RCT の報告のためのガイドライン（CONSORT）の活用、RCT という表現について質疑がなされた。いずれも妥当な回答が得られ、論文にはガイドラインに基づき記載が追加された。教育研究において教育介入を研究者が行う関係で、教員側のブラインドが困難であること ITT 解析が国内外で用いられていないことおよび、同じ学内で学生、教員間の交流の制限も限界があることから看護学教育分野ではガイドラインを遵守する記載には限界があることも示された。

状況基盤型教育プログラムは、臨床現場の複雑な状況に応じて正確に血圧を測定できる実践能力の習得を目指して開発されており、多様な測定用具や患者の病状に合わせた測定方法を判断・実施・報告する能力を養うプログラムである。従来の測定手順に応じた技術習得の教育以上の内容を含み、臨床判断能力の育成という時代のニーズとも重なり、新規性がある。

＜発展＞

本チェックリストは開発初期段階であり、バイタルサイン測定に関して患者の真値と比較するものではない。さらに、同様の多様な状況を踏まえた信頼性のある測定用具がないため、今後に基準関連妥当性の検討が必要である。また 1 施設での実施であり、コロナ禍の 2 年次生を対象にした影響も考えられる。引き続き、信頼性、妥当性の検証を行い、チェックリストが洗練された際には学生のみならず、臨床の看護職の現任教育での活用へと発展が期待できる。また自己評価用としての活用も期待できる。

状況基盤型教育プログラムも開発初期段階であるが、血圧測定以外にも範囲を拡充する、対象者のレディネスに応じた段階的・継続的な教育プログラムとして洗練し、評価する等、発展が期待できる。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査： 埼玉県立大学大学院　保健医療福祉学研究科 教授 鈴木　幸子

副査： 埼玉県立大学大学院　保健医療福祉学研究科 教授 北畠　義典

副査： 姫路大学大学院　看護学研究科　教授　白水　眞理子